ISSN 2758-6715

2024年　第1号

デジタル版

中央区ユネスコ協会 ジャーナル

Chuoku UNESCO Association Journal

発　行／中央区ユネスコ協会
発行人／藤掛正史
発行日／不定期

〒104-0054
東京都中央区勝どき2-8-12-306 (株)脇村工業所内
TEL 03-3533-1505
https://chuo-unesco.jp/

中央区ユネスコ協会ジャーナル　第２号　「世界に伝わるサダコ物語とユネスコ憲章の精神に学ぶ」講演会

ISSN 2758-6715

目次

挨拶　中央区ユネスコ協会　藤掛正史会長

ドキュメンタリー映像　視聴『父と子　心の旅』

講演「世界に伝わるサダコ物語とユネスコ憲章の精神に学ぶ」講演会～ユネスコ世界の記憶登録にむけて～
佐々木　雅弘氏（禎子の兄）、佐々木　祐滋氏（禎子の甥）

司会:皆様、こんにちは。今日はお忙しいところ、こんなに沢山の皆様にお集まりいただきまして、ありがとうございます。私、中央区ユネスコ協会の事務局長をさせていただいております、長谷川芳見と申します。今日は進行役を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。では初めに中央区ユネスコ協会会長、藤掛よりご挨拶させていただきます。

藤掛:どうも皆さんよろしくお願いいたします。このたびはこんなに集まっていただきまして、コロナ禍の中ではあるんですけれども、万全に対策してやっていかないとと思っております。今日は日本ユネスコ協会連盟の方から事業部長の方にお越しいただきました。尼子部長です。東京に26(のユネスコ団体)あるんですけど、こうやって来てくださったことは本当に光栄です。本当にありがとうございます。今回も尼子部長の方からフラッグをいただきましたので、私たちは本当にこのフラッグに恥じないような活動をしていきたいと思います。もう一度日本ユネスコ協会連盟の担当者の方に拍手お願いいたします。それからですね。東京は26だと思いますが、この全ての東京都のユネスコ協会を全部管轄されておられますところの会長様がわざわざ今お越しいただいているんです。池田会長ですね。東京都ユネスコ連絡協議会の会長の池田会長どうもありがとうございます。それから長年、東京都ユネスコ連盟協議会の会長を支えまして、ずっと事務局長を担当してくださっておられます木間事務局長です。私たちはまだ生まれたばかりの会ではあるんですけど、こうやって日ユ(日本ユネスコ協会連盟)の責任者や東京都ユネスコ連盟協議会のトップの方、事務局長が来ていただいて、本当に光栄に思います。頑張って今日はこの講演を成功させていただきたいと思っております。また中央区の行政の方から浜野先生が来てくださいました。今日はもう中央区の行政の方にも来ていただいて、こうやってイベントができるということは本当に有難いことだと思います。それでは私の方から長くなりますとあれですから、このぐらいで挨拶と変えさせていただきます。今日は4時までで長丁場になりますが、ユネスコの精神にも通ずる広島の佐々木禎子レガシーをしっかり勉強していただけると思いますので、1つよろしくお願い申し上げます。どうもありがとうございます。

司会:ありがとうございます。たくさんの素晴らしい皆様と共に、今日は『中央区ユネスコから世界に伝わる禎子物語とユネスコ憲章の精神に学ぶ講演会』をさせていただきたいと思います。ユネスコ世界の記録登録に向けて活動されている佐々木様親子ですね。こちらが禎子様のお兄様の佐々木雅弘様、そして甥御様の佐々木裕滋様にご講演をいただきたいと思います。とても長いプロフィールをいただいたんですが、時間も迫っておりますのでお2人にお任せいたしまして講演とさせていただきます。最後までよろしくお願いいたします。

ISSN 2758-6715

写真左から　雅弘氏（禎子の兄）、祐滋氏（禎子の甥）

裕滋：皆様ただいまご紹介いただきました、私は中央ユネスコ協会理事もやらせていただいております佐々木祐滋と申します。今日は横に父親を連れてまいりまして、『世界に伝わる禎子物語とユネスコスクール』というタイトルで講演をさせていただきます。広島の平和公園に原爆の子の像という銅像がありまして、そのモデルとなっているものが佐々木禎子といいます。この中でその原爆の子の像を実際に見たことがあるという方、いらっしゃったら挙手をお願いしてもよろしいですか。どうもありがとうございます。ほとんどいらっしゃいますね。その1人の少女がモデルとなっています。佐々木禎子というんですけども、隣にいます私の父、佐々木雅弘です。雅弘がその禎子の2つ上の兄になります。後で詳しくお話はしますけども、今から78年前の8月6日、広島に原爆が投下された当時ですね。僕の父、雅弘も含めて爆心地から1.5キロの自宅で佐々木家が被爆しております。雅弘は現在81歳になりましたが妹の禎子を通じて、おかげさまで元気に世界中に平和を伝える活動をしております。そこに僕も加わってます。今日は雅弘の息子、娘たち、それから奥さんも一緒にいます。佐々木家一同ですね。佐々木家一同で活動をしているという現状です。その辺を今日細かくパワーポイントを使って写真などを使いながら皆様に詳しくお話を聞いていただこうかなと思います。まず、わかりやすい形で、今から映像を30分ほどこちらの方で見ていただこうと思います。つい最近広島テレビ様にドキュメントとして活動をずっと追っかけていただいてる中で、一番最後の活動を一つの番組にしていただいております。これをまず見ていただいたら、話がさらに分かりやすいんじゃないかなと思いますので見ていただこうと思います。このマイクを使ってこのパソコンから出てくる音声を拾うので少し聞きづらいかもしれないですけれども、ご了承いただければと思います。

【ドキュメンタリー『父と子心の旅』を視聴】

裕滋：はい。活動を分かりやすく映像にしてもらったものを見てもらったと思いますが、これから改めてパワーポイントで写真を使ってなぜ禎子が原爆の像のモデルになったのか。その闘病生活中のあまり知られていない詳しい話を皆さんにお伝えしようと思います。これが原爆の子の像の実際の写真です。この銅像の一番上のモデルとなっているとなっている少女が佐々木禎子といいます。こちらが実際の禎子本人の写真です。先ほども言いましたけれども、爆心地から1.6kmの場所にある楠町というところで佐々木家は被爆をしました。そしてこの右側の実際の写真が爆心地です。皆さんも聞いたことがあると思いますが、世界遺産にもなっている平和公園の中にある原爆ドームですね。これは上空で原爆が爆発したということで、原爆ドームのあの辺りが爆心地と言われております。爆心地から半径2km以内が壊滅です。この写真のように焼き尽くされてしまった。でも佐々木家はその1.6kmの楠町で被爆をしたんです。それは禎子、兄の雅弘、お母さん、おばあちゃんの4人で朝食を食べている時でした。雅弘は4歳です。禎子は2歳下で2歳ですね。朝食を食べている時ということで、父に話を聞きましたら、当時の記憶は鮮明に残っているということだったので、当時のことを少しお話していただこうかなと思います。

雅弘：皆さんはじめまして。禎子の兄の雅弘です。今日は少し時間を頂いて息子とやり取りをしながら話をさせていただきます。今、禎子のことを知っているのはもう私1人だけです。父も母も亡くなっておりますので。現実に皆様方に生の声で禎子の話を聞いていただくのは、これがおそらく最後の機会になるのでは無いのかなと言うふうに思っております。一期一会と申しますが、今日お会いした方は二度とお会いする機会は無いのじゃないかなと思います。私は病気というわけではございませんけれども命には限りがございます。ですから命の続く限りは禎子について、繋がる平和について、あるいは戦争のむなしさ悲惨さ、そういったものについてお話しして参りたいと思います。今日禎子との事について詳しくお話しするのは皆様

が最後かと思いますので、どうか皆様方のお口から周りの方に禎子の事の真実を繋げていただきたいなというふうに思っております。今息子が言いましたように被爆当日はすごく快晴で、本当に雲1つ無いすごい晴れの日でした。近所のおばさんの声で私たちは外に出ました。「きれいなものが空に飛びよるけん見てごらん」と言って声がかかりましたものですから、私と禎子と母が（おばあちゃんだけは食事中ですから中に残っていました）外に出て東の空を見上げましたら、原爆を投下したエノラ・ゲイ(B24爆撃機)とそれを確認する飛行機が2機、キラキラ光りながら強い日差しの中で飛行機を照らしてました。まぁ見たこともない。綺麗なキラキラ光るものが今も非常に印象に残っています…
おそらく禎子もそうだったと思います。それをしばらく見ていたら、おばあちゃんが「中に入って食事しなさい。途中だから。」と呼ばれたもんですから、私たちは中に入りました。入って御膳の所へ座った途端でした。いわゆる原爆が炸裂したわけです。そのまま15秒か20秒か違って、そのまま外に立ってまだ見ていたら、禎子もおりませんし、今の私もおりません。人間の巡り合わせってそんなもんなんですね。たったさっきまでそこにいたじゃないかとか。だから今日皆さんとお会いするっていうのはものすごく意義がありまして、今日禎子の話をぜひともしっかりと心に刻んで帰っていただきたいと思います。当然家はもう粉々ですね。2km以内はもう壊滅ですから。

裕滋:そんな状況だったのですが、奇跡的に4人ともほぼ擦り傷で何とか崩れた家から逃げることができたそうです。これは奇跡ですね。ただその後街はもう焼け野原になってますから、その燃え盛る火の海を抜けて何とか川まで行って逃げたんですよね。そうするとそこの川でまたすごい体験をすることになったんですよね。

雅弘:これは禎子の体験と言うよりは、禎子と私と母とおばあちゃんの体験です。川まで200メートル位の土手までは逃げたのですが、いわゆる原爆の火の熱によってコンクリートのもの以外は全部燃え上がってるわけです。いわゆる火炎ですよ。火の渦になっているわけです。その中を母が私たちの手を引いて川まで逃れていきました。ただ残念なのは、川について船に乗り込む前におばあちゃんが「子供のものをちょっと取ってくる。」と言ってそこから引き返したんですよ。母は止めました。私も「ばあちゃんダメだ！」って言ったようです。でもおばあちゃんも年寄りですから孫のために何か持ってこないとということで、そこから引き返した。もう母の言うことも聞きません。
後で聞きましたら、昔は全部の家に防火用水という水瓶があったんですが、「佐々木のところのおばあちゃんは、その水瓶に頭を突っ込んで死んどったよ。」ということでした。だから、原爆の被爆者というのはほとんど遺骨がわからないんですよ。もう誰が誰かなんてわかりませんから。でもおばあちゃんは近所の人があの家のお松さんだからということで分かっていたので火葬場で特別に焼いてもらって、今でも骨は残っております。そういう風な状態で川に5時間くらいおりましたか。そしたら、皆さんご承知のように黒い雨が降ってきたんですよ。この黒い雨は爆心地から西方向に向かって大体楕円形にぐっーと伸びてその中だけに降った。あの雨は放射能と血といろんなゴミともう混ざり込んでコールタールみたいな真っ黒い雨、これがいわゆる黒い雨と言われているものです。それに禎子と私、母ももちろん打たれました。ひょっと禎子の顔を見たら、もう真っ黒。真っ黒い雨の筋が流れているわけですよ。びっくりしました。あと原爆っていうのはいわゆる大火傷ですから、そうすると火傷するとみんな水が欲しいわけですよね。水を飲ませると大火傷のものはすぐそこで死んでしまう。同じことですよ。火傷したものがみんな水を欲しがって川に集まってくる。そしてその川の水を1口飲んで息耐えるわけです。周りの川の側を見ると、まぁすごいです。あれが地獄絵と言うんでしょう。もうすごい死体が積み重なって…川の浮き草のように。私たちが乗ってた小舟の周りの横の方は、もう死体がずっと流れていくわけですね。そこで5時間くらい辛抱したっていうのが真相です。まぁ怖かったと思いますよ。私も怖くて泣きました。ただ大泣きしてました。

裕滋:そこで黒い雨を浴びたんですけど、何とか避難所に逃げることができたんですね。そこから8月9日に長崎に原爆が投下されて、15日に終戦を迎えるわけですよ。そこから広島の街は徐々に徐々に復興の道を歩み始めていくんですけれども、佐々木も当然徐々に徐々に普通の生活に戻っていきます。戦争は8月15日で終わったんですけれども、実は広島の街はですね、その戦争後にもですね、実際に原爆によって被害に遭われて、その体に傷

を負ったり、原爆症で苦しむ方々というのはその後もたくさんいたわけですね。そんな中、これは僕も父から初めて聞いた時にびっくりしたんですが、アメリカ軍が当時広島の市内に1つの施設を作ったんです。『ABCC』と言いまして、今でもあります。これは日本語名で原爆傷害調査委員会です。名前を聞いてなんとなくご想像していただけると思うんですけど、原爆によって怪我をされた方、またその後何かしら体に障害が起きる、どういう障害が起きるのかというのを調査をしていく施設機関だったんです。なので被爆者はそこで毎年1回必ず検査を受けなくてはいけないという義務があったんです。それを聞いたときに、戦争は終わったけれども、その後も広島の人たちはずっと苦しみ続けていたんだ。そう僕は思ってて。それから78年経ちますけれども、実は今も続いているんだなぁっていう事実ですね。だからこれは本当に伝えなくてはいけないなぁと思うんですね。ただそのABCCで被爆者の方々が検査を受けて、いわゆる原爆症と言うもので当時1番恐れられていたものというのはなんだったんですか？

雅弘:ABCCの役割は原爆傷害調査委員会ですから、いろんな被爆後の調査をするって事はお分かりだと思います。当時医療制度もそんなに充実していませんでしたから、私たち被爆者にとって1番ありがたかった事は1年に1回は自分の体の状態がわかるということです。しょっちゅう自分の血液の成分を調べることなんてできないんですよね。でもABCCに行くとすべての血液の成分が今どういう状態だっていうのが返ってくるわけです。それを見ますと、白血球の数っていうのが必ずあるんです。大体通常6000から8000白血球の数なので、この範囲内に数値が収まっていれば「あ、今年も自分は助かった、白血病にならなくて済んだ。」とこういう風に私は確認をしたんですよ。だから多分禎子も確認してたはずなんですよ。

ABCCに連れて行ってもらう時は当時日本人が乗れないステーションワゴンっていう凄い車が迎えに来て、ふかふかのシートに乗って行くんですよ。帰りはキャンディーとかチョコレートとかもらえてもうそれは非常に嬉しかったです。ところが1番嫌だったことがありました。これはABCCを悪く言うんじゃないですよ。体験としてもう本当に嫌だったことがあります。それはもう皆がするんですけど、行ったら、もう全部素っ裸です。もう丸裸にされて、上下左右前後、斜め。すべて写真を撮られるんですよ。これはね素っ裸で撮られる。私が恥ずかしかったから、禎子は女性だし多分恥ずかしかっただろうと思いますよ。でもそれは嫌ですって拒否はできない。それがABCCに行く時に唯一嫌だなぁという思い出でした。

でも皆さんに言っておきますけど、被爆してアメリカを憎んだことってこれまで1回も無いんですよ。本当に。よくマスコミの方から「あなた、被爆したんでしょう？原爆を受けたんでしょう？アメリカが落としたんでしょう？憎くないんですか？」と聞かれたことが何度もあります。でもはっきり言って、1回もアメリカを憎んだ事は無い。それは何故かと言うと、被爆後ずっと時間が経ちまして、禎子が入院する前後に広島女学院大学に講師として来られたアメリカのエリザベスステーラーみたいな先生がいらっしゃったんですね。金髪の方で、今でも鮮明に記憶に残ってます。メリーマクミラン先生っていう、会うと恥ずかしくなるくらい、美人な先生でした。その先生は親身になって私たちの家族、私と禎子の面倒を見てくださった。だからアメリカを憎むところじゃないですよ。当時もう何も物が無いっていう時に、ガロンでチーズを持ってきてくれたりしてね。もう凄く親身になってくれたから、そういう影響もあってアメリカの人ってこんなに優しいんだと思って。それと同時に、当時思ってたのは、アメリカの家庭には1家に2台も車があって、こんなステーションワゴンみたいな車が二台あるって聞いて、羨ましい国だなぁと、世の中にはそんな国もあるのかぁ…と。それで私は、「絶対に将来日本はアメリカのように皆が車に乗れるような国にしたい！」とその時に本当に覚悟したんですよ。だからずっとアメリカの栄光を追いかけたっていうか。そういう感じなんです。そんな中で駐留軍が来て「ギブミーチョコレート、キャンデー！」って言うと乗っていた兵隊さんが、ばーっと投げてくれるわけです。だから子供たちがアメリカを恨む筋合いは1つも無いですよ。もう嬉しいばかり。そういう中で育ちましたけど、戦争を体験した方、実際に戦った人とも私は話をしました。多少考え方は違いますけど、さっき映像にも出てきた101歳の長沼さん。死ぬまで攻撃に加わったというような人でも、時が経つともう恨みはないということなんですね。これは時間が解決するということもありますし、戦後の日米の私たちの関係の中でそういうことが生まれたということもあります。だからそういう関係を今後もずっと広げていこうと裕滋、私(雅弘)、そこにいる長男とで共に頑張っているというところです。

裕滋:要は被爆者の方々が何を恐れていたかというと、白血病という病気を恐れていたわけですよ。当時そういう環境にあったものですから、噂も広島の中で流れ始めて。被爆してから15年白血病が出なければもう大丈夫だと言う噂まで流れたんです。だから父もそうですけど、皆さん15年経つのを心待ちにしながら生きていたという現状が当時あったということですね。被爆してから15年間白血病が出なければもう大丈夫だという噂の中で生きていました。生きていた被爆者の方々は、佐々木家の父(雅弘)も言っていましたけど、とにかく早く15年経たないかなということが心の中にずっとありました。その被爆者の人たちはたとえ体にその傷を負っていなくても、その心の部分という意味では、本当に常に恐怖に怯えているような生活を強いられたということですね。そんな中、父(雅弘)もそうですし妹の禎子も原爆症と言われている症状というのは出ずに小学校へ入学し、本当に普通の生活に戻って行ったんです。でもそれが被爆から10年後、先ほど15年と言うキーワードがありましたが、10年後ですね。ちょうど12歳の時に突如禎子が体調を崩します。それまでは小学校は1日も休むことなく、皆勤賞で毎年表彰されるくらい健康な女の子だったんですよ。それが10年後の12歳の時に突然体調を崩す。ちょうど小学校の卒業を間近に控えた頃ですね。親戚のおばちゃんのところに遊びに行ったら、少し体調崩しましてね。微熱がずっと続いてました。体のだるさも取れない。それで喉の腫れが引かないんですね。初期症状ですから両親はただの風邪だろうと当時は思っていました。そんな心配していなかったのですが、何故かその時たまたま遊びに行った親戚のおばちゃんがその姿を見て、検査に行ったほうがいいと禎子の両親になぜか強く後押しをしたんですよ。おばさんが言うには「10年前に被爆している。それがあるから、見てもらえば安心じゃないかね。」ということで検査に行きました。それで最初はABCCに検査に行って、検査結果がそれで返ってくるわけですよ。すると最初の検査結果で白血球の数がすごく多かったんですね。その辺を確認する経緯をお願いします。(マイクを雅弘に渡す)

雅弘:今裕滋が言ったように、1954年12月の末に親戚の家に行くと、おばさんが異常に気付いて、父に連絡してきた。1955年1月初旬にABCCに連れて行って結果が返ってきた。その結果が近くの畑川小児科に返ってきて、父が呼ばれました。その時の白血球が3万2000でした。通常は6000から8000ですからちょっと比べてみてください。もう尋常じゃないわけで。それで畑川先生が「佐々木さん、びっくりしなさんなや。」と、こう念を押すわけですね。それで父がいやびっくりしませんから、何でも言ってくださいって父が言いましたら、先生は「実は禎ちゃんは早ければ3ヶ月、長くても1年と思ってください。」と言う宣告をされたの。それで父はびっくりして母の所へ帰ってそのことを伝えるわけですね。それが原爆症発症の最初です。

裕滋:(写真を見せながら)ちょうどその頃の写真ですね。この12歳の禎子本人です。下にも書いてあります。それで2月の21日に広島の赤十字病院って言う所に入院します。これは当時の自宅の写真ですね。八丁堀と広島の一頭地のど真ん中です。当時でも珍しい3階建ての自宅で、1階で両親は床屋を営んでいました。床屋のほうも非常にお店の方が繁盛してました。入院するちょっと前までは、経済的には結構余裕のある生活をしていたんです。そんな中で白血病を発症して急遽入院という形になるんですけれども、2月の21日に入院して実質闘病生活8ヶ月間でした。10月の25日に12歳という短い生涯を終えてしまうんですけれども、この入院生活中のお話というのは、実はあまり知られていないんです。それを今から詳しくお話しするんですけども、まず皆さんに1つお伝えさせていただきたいと思います。8ヶ月の入院期間、この間でたった12歳の禎子はとてつもない苦しみを抱えていた闘病生活だった。これを頭に入れていただきたいです。

そのうちの苦しみのうちの1つが「金銭的な苦しみ」です。ただいま言いました通り、3階建ての自宅でやっている床屋が繁盛していまして、実際はお金に余裕があったんです。それが入院するちょっと前に、近所のクリーニング屋のおじさんの借金の保証人に禎子の父親がなってしまいました。近所で親しい付き合いがあり、保証人を引き受けてしまいました。その後、そのクリーニング屋さんは借金を残したまま突然蒸発をしました。なので保証人である禎子の父親が、借金を背負わざるを得ませんでした。ただ、それだけだったらまだまだやっていける余裕はあったんですけれども、入院中の治療費が佐々木家に物凄く重くのしかかってきます。当時白血病という病気の治療に対して保険は適用されませんでした。ただ、治療と言って

もそんな大した治療は無いんです。輸血、薬、あとは痛み止めの注射くらいです。白血病は血液の癌ですから、進行してくるにつれて体中に紫色の斑点が出てきて、関節という関節に大人でも我慢できない位の激痛が起きてくるんですね。それを止める痛み止めの注射ぐらいしか無かったんですけれども、それでも保険が効かないので莫大な治療費がかかりました。具体的にはどれくらいですか？(雅弘にマイクを渡す)

雅弘:当時1人のお客様を散髪して、1回いただく散髪代の料金が当時のお金で150円でした。今の料金に換算すると、3000円4000円と言うところでしょうか。当時150円で、今息子が言いましたように、白血病には治療法がありませんでしたので、ただ輸血です。その輸血も血液代金の現金と交換じゃないと買えないんですよ。保険なんて無いんですから。血液代がいくらかって言うと、1パックが100 ccで100ccが800円するんですよ。800円を持って行って、初めて輸血が100 cc買えると。それを病院の先生が点滴をして注射してくださるという感じですね。そうすると今申し上げたように1人のお客さんを接客して150円ですから、1パックの血液を買おうと思ったら6人しなきゃいけないんですよ。1日6人のお客さんが100 ccの血液代で消えるということです。それに生活費がかかるでしょ。それにさっき言いましたように、父に借金の保証人を頼んだ方は全てそのままにしてお逃げになったわけですから、莫大な借金が父にかかってその返済がそこにプラスされます。そうすると経済的に全然余裕が無いわけですよ。本当に当時は食べる米にまで母は困ったようですよ。あとリウマチの治療薬でコルチゾンというのが当時もあったんですよ。それは痛み止めなんです。それが1回注射をするのに2100円かかる。ということは何人お客を接客しなきゃいけませんか？ 150円で割ってみてください…ここから私は魂で禎子のことを語りますので、涙が多分出ると思います。当時の事がぐーと思い出されてきてね。ごめんなさい。でもそれは本当のことですから、いつしゃべっても同じことをしゃべるんです。それで禎子の魂を感じてもらいたい。

裕滋:それくらい治療費がかかったという事実があって、裏を返せばほとんど治療はしてあげられなかったということなんです。それは僕も生前にじいちゃん(禎子の父)からよく聞いてました。そこだけが悔やまれると。とにかく自分が借金の保証人になったっていうこともあったりしましたが、とにかく治療費を必死になって作ったんですけどね。だけどもなかなか高額な治療費がかかったので、ちゃんとした治療をしてあげられなかったということは言ってました。だから金銭的に非常に苦しいんだっていうことは、禎子本人もやはりそれに気付くわけですよ。お父さんお母さんがお金で苦しんでると。それでこの自宅も入院してる途中に売ってしまうんです。売ってまで治療費や子供たちの生活を作らないといけないということで、この自宅を売ってしまうんですね。自宅を売った時点で、禎子本人は今度は自分を責め出すんですよ。私が病気になったから、両親がお金に苦しんでいるというところでね。自分を責めていましたが禎子本人は「そのことを自分が口に出すと、また両親がお金に苦しむ…」ということで、本来は絶対に痛かったはずなんですが（注射は2100円で打てませんから）痛いということを言いませんでした。本当に苦しみというものを全く表に出さずに、自分の中に仕舞い込んでいたという事実をまず1つ覚えておいて下さい。経済的な苦しみですね。

そしてもう1つが経済からくる精神的な苦しみというのもあるんですけれども、それにプラスして、もっともっとすごい苦しみを禎子本人が抱えていたというのが亡くなった後に分かりました。この写真を見てください。(資料を見せながら)資料館に展示してあります。これくらいのメモです。本人の手書きです。これが亡くなった後、ベッドのマットをめくった板との間に挟まっているのを見つけました。それでは上から見ていって下さい。まず白という漢字が書いてあります。数字は1万4000とあります。次に赤は420万。そして血という漢字は78%。そしてその下は9日という日付ですね。そしてまた同じように白7200、赤320万、血63%。それで次は16日。見てお分かりいただけると思いますが、この白というのは禎子本人の白血球の数字です。赤は赤血球の数字です。血、これは血色素の数字です。これをある日付ごとに、実は検査をしたカルテから誰にも気づかれないように本人が自分でメモとして書き写していたものだったんです。

雅弘:このメモは全部映っていませんけど、実は2月21日の入院の日からつけてるんですよ。入院の2月21日、白血球3万4600と。検査の単位の日付を書いて、全部写し

ていました。それで比較的1万4,000か7200とか、16とか9とか26とかあります。これは4月のところを今映していますね。4月はちょっとだけ安定したんです。それは何故かというとアメリカのABCCからメトトレキサートという白血球を減少させる薬が発明されたので、禎子に使えると言って使ったものだから、ちょっとだけ減少したというところがこれに現れています。2月21日から7月4日までつけていました。それで最後にね、1枠空いてるんですよ。わざわざ1枠残している。なんでかなぁと思ってずっとわからなかったんだけど、病院の先生のカルテをもらって見たら、7月4日の次の検査が7月16日なんですよ。その16日の数値を見て私自身がびっくりしました。白血球の数がなんと10万8600になってたんですよ。白血球が10万を超すなんてもうこれはお話にならない。もう命がないって言う決定的な証拠なんですね。その数値を禎子は見て書き込もうとしたけど、もう私の命はこれで終わりなんだっていうね。そういうことを感じ取ったがために多分書きたいけど手を止めたっていうのが最後の1枠なんですよ。7月16日。4日までは書いてます。それで亡くなった後にこれがそっと出てきたわけでしょ。私は全然知りませんでした。お兄ちゃんが知らない、お父さんお母さんも知らない、看護師さんも知らない、誰も知らないメモなんですよ。これが禎子の凄いところなんですよ。

裕滋:だから結局、入院した時から書いてるってことですね。つまり先ほど話した、戦後からの広島の中での生き方ですよね。もうこの部分でひょっとするとという不安が、入院した時にやはり本人もあったんでしょうね。だからこそ入院した時からカルテを見ていた。その7月4日までというところのカルテをとにかく写していた。それでもう1つ、衝撃的な事実が分かりまして、本来であればカルテというものは、一般の患者さんが見てもわからないように、ドイツ語や英語で書かれたりしてあるんですけれども、禎子が見たであろう日付、4月30日のカルテのところにはですね、院長回診の欄というものが挟んでありまして、そこに病名がなぜか日本語ではっきりと書かれてあったんです。正式な病名は急性リンパ性白血病です。結局その4月30日の数値を書き写してるわけですから、確実にその病名も見てるんですよ。だから本人は、その4月の時点で自分は白血病であるということをはっきりは分かっていたということなんです。でもですよ。普通であれば白血病に罹れば長くは生きていられないっていうことの中で生きているわけですから、それを見てしまった12歳の女の子が本来であればそういう迫りくる死の恐怖には我慢できないですよ。でも一切そういった苦しみというものを表に出さなかったですよね。痛いとも言わない。死ぬっていうことは分かっていたのですが表情に出さない。結局これは亡くなるまでそうです。だから家族は気付かなかったんです。常に笑顔で大丈夫、大丈夫と言って、家族や友人の前では明るく振る舞っていたので、誰1人気付かなかったんですけども、本人たった12歳の女の子はその壮絶な苦しみを1人で抱え込んでいたということです。それでこれを見てください。今白血球の話をしましたけれども、上の青い部分がですね。入院してから数字が2月から10月まで書いてあります。上の部分が入院してから亡くなるまでの白血球の推移を表したグラフになってますね。まず2月に入院する頃が3万から4万ですね。それで3月はちょっと上がってますね。6万から7万くらいに。それで先ほど言ったメトトレキサートという白血球を抑える薬で、4月5月6月の平常の白血球の数値になって容体は安定してるんです。それで7月見てください。ドーンと上がってるんですよ。これがさっき父親が言ってました。1番白血球が上がってメモも止めてしまったという7月。理由がこれだったんですね。7月は10万を超えたんです。それでまた下がりまして、8月9月ちょっと抑えたが亡くなる前にちょっと上がってます。たまたまなんですけども、この7月に先ほど父親が言った18日の白血球10万8400と最悪な時の父親との写真が残ってたんです。これがその時の本当の写真です。僕は生前じいちゃんに聞いたことがあって、そのさっきのメモを見つけた時にさっきのカルテと照らし合わせてみて、あ…書き写していたんだということが分かったじゃないですか。その時にある1つのことを思い出した。(禎子と雅弘さんの写真を見せながら)それがちょうどこの頃です。7月の半ばこの頃に禎子が1回だけ急に突然「お父ちゃん、人って白血球が10万超えたら助からんの？」っていうことを聞いてきたそうです。雅弘さんは白血病だということは知ってたんですか？(知らない)だから要するに両親が身内も含めて隠していたので、まさか禎子本人が知っていると思いませんから、「ワシはちょっと簡単に答えてしまったんだ。」って言ってました。「10万超えたらもう助からんで。」って、それがちょうどこの頃ですね。それを思い出したって言ってました。だからそれも聞いた上で、おそらく

先ほどのメモが空欄だったんじゃないかと。イコール自分の死を覚悟したんだと思います。これが亡くなった後に出てきた苦しみの証拠ですね。それで7月の18日が10万超えて最悪で、まぁ自分はもう死ぬんだ、助からないんだっていうような絶望の中でですね。神様は一筋の希望を12歳の禎子に送ります。それが『折り鶴』っていうものなんです。これが当時の新聞の記事です。いつの記事かというと8月3日です。どういう記事かというとですね。名古屋に今でもあります淑徳高校という高校の学生が赤十字でそういう活動をしておりましたので、その繋がりで日本赤十字病院広島に原爆症で苦しんでいる方々がたくさん入院していたので、病院に対して慰問の千羽鶴を4000羽を送りましたという記事なんです。その4000羽が日赤病院に届きまして、小分けにされて各病室に届けられたんですね。そこで禎子本人の手元に折り鶴が届いてまた父親に聞くんです。「お父ちゃん、なんで千羽鶴を折るの？」そうすると父親が「日本には昔から鶴を千羽折れば病気が治る、願いが叶うという言い伝えがあるんだ。」ということを教えたのは、この8月3日なんです。この日から亡くなる10月25日までの数ヶ月間、毎日毎日折り鶴を折り続けました。もうここに賭けるしかなかったんだとおじいちゃんが言ってましたね。「とにかく今日はもう止めとけ。」と言っても止めなかったとも。

雅弘:広島弁でね、「禎子。これ以上根詰めたら、もう具合が悪くなるけん止めときなさい。」って父親が何度も言ったそうですよ。そしたら禎子が「お父ちゃん、いいからいいから。私にも考えがあるけん。」こういう風に言ったそうです。「分かってはいるんだけど、いいよお父ちゃん、私は私の考えがあるから大丈夫よ。」ってそういう言い方なんですね。それを聞いて、父はもう本当に自分が亡くなるまで、「あの時もうちょっと禎子の話を聞いとけば良かったなぁ。」とかね。「何を言いたかったんじゃろうか…」とか言ってました。せっかくですから簡単に入院中の禎子の苦しみを皆様にお伝えしておきます。話の中にさっきちょっとありましたけど、要は12歳の子供がなんでここまで我慢できるかっていうのが、今でも私は疑問です。禎子じゃないとできないからこそ、禎子にこういう使命が与えられたという風に今思ってますし、禎子は佐々木家が神様から預かった子供だと、そうしか思えないんですよ。例えば経済的な最低の苦でしょ？これ12歳の子供は、普通自分の体が痛かったら注射を打ってもらいたいんですよ。本当は。毎日来てもらいたいんですよ。「父ちゃん母ちゃん、今日痛いから早く来てね。」って12歳の子供だったら言うでしょう。言わないんですよ。だからその分だけ父も母も苦しむんですよ。なんで言うてくれんのじゃろうかって。でもね、よっぽど言いたかったんでしょう。夏のある日、たった1回だけ入院中、8ヶ月の入院中ですね。たった1回だけ禎子から父に電話がかかってきました。「お父ちゃん…今ね…お見舞いのお金150円持っとるけん、注射打てる？」っていう風に言ったそうです。要は自分が150円持ってて、あとの残りのお金はお父ちゃんに頼みたいってもっと言えば良かったんだけど、禎子も言い切らないわけですね。お父ちゃんいいやろうかって。普通の子そんな風に言えます？12歳ですよ？私やったらダメです。だから「お父ちゃん、150円持っとるけんいつでもいいけんね。」って言ったそうです。さっきも言いましたように痛み止めを打つんだったら2100円かかるわけですよ。それで借金取りが出入りするからお客さんもほとんどお店に来ないんですよね。借金取りが出入りしたらもうお客さん来ませんから。だから先ほど150円のお客さんを何人接客しなきゃいけないかと計算していただきましたね。あの金額を稼ぎ出そうとしてもいかんわけですよ。それはもうできないですよ。禎子はそれも知ってました。知ってたからこそ、8ヶ月の入院の中で1回ですから、お父ちゃんって電話がかかってきたのは。そんな12歳の子供はおりませんよ。それが経済的な苦です。肉体的な苦っていうのは、息子がさっき言いましたように血液の癌ですから、全身に転移したらもう強烈に痛いわけですよ。血液の癌だけじゃなくて癌というのは全身に転移したら、大人でさえ我慢できないわけでしょ。我慢できないから今はずっと四六時中鎮静剤打って寝かせてあるんです。だから痛いとか言わないんですよ。そのかわり口も聞かんから、あーあーと思ったら亡くなったという感じなんですね。でも禎子の場合は痛み止めも1回も打たせないんですよ。いいですか？癌のあの痛みに対して、痛み止めも1回も打たせない。それはちょっと…12歳の子供はできないと思います。私もできません。それが最高の苦でしょう。それから自分自身の極限の精神的な苦。もう何もかも我慢しなければいけない。お父ちゃんに今こういうたら、お母ちゃんにこう言ったらどうやろうかそういうところまで考える子なんですよ。考えなかったらさっきも言うようにお母ちゃんお父ちゃん今日来

てって、痛いって言うはずなんですよ。そんなところまで気を遣う。そしてたった1回だけです。涙流したのは。私は禎子の所へ何度も行きますけど、この兄ちゃんの前ではもう絶対に何でもないような顔してるんですよ。斑点だらけでも(体中斑点だらけです)見たことないんです。私が行く時、親が行く時、人が行く時は、斑点が出てる所を全部ぐるぐる巻きにして、全部隠してたんです。だから私知らないんですよ。そんなに(禎子の斑点が)凄かったのかと。後でカルテを見てみると、胸なんかに潰瘍がちょこっとできたってのが書いてある。もう1ヵ月もすると、ずっと全身全部に潰瘍ができていて、それは凄い痛みであろうし、すごい苦しみだと思いますよ。そんなこと1回も言わないんですから、そりゃ親も聞いたらびっくりしますけど、心配させないと自分で我慢をしてしまうという精神的な苦痛。これはいかほどであっただろうかということを父と母はもう自分が死ぬまで苦しんでました。だから病院で泣いたのも1回です。涙を残したのはたった1回ですよ。病状が悪くなって、母が病院にお見舞いに行きました。本当に禎子は喜んだそうです。久しぶりにお母ちゃんが泊まったから。「母ちゃんが来てくれた！嬉しい！」って言って喜んだそうです。母がベッドの上で禎子の長い髪の三つ編みをゆっくり梳かしてやると、白血病ですから髪の毛がずーっと抜けるわけですよ。それで「あ…」とお母ちゃんは思いながらも、それに気が付かないように処置をして。禎子は「もうお母ちゃん、嬉しい！今日は一緒に寝れて！」って言って喜んだそうです。それで翌朝も稼がなきゃだめですから、母ちゃん帰るねって帰る時にすぐ近くにエレベーターがあったから、禎子が足を引きずりながら送って出たんですね。そしてエレベーターに母が乗り込んでエレベーターのドアが閉まるでしょう。ドアが閉まる、そのちょっと前にですね、ハッと母が禎子を見たら、禎子はもうボロボロと大きな涙を流していたそうです。だからお母さんはびっくりして、さっと扉をこじ開けて、禎子をしっかり抱いた。禎子は「お母ちゃんー！！」て言ってね。禎子は初めて泣いたそうですよ。だからお母さんも禎子をしっかり抱いて、もう泣いてやるしかないんですよ。お金が無いんだから禎子が泣いたからってどうしてやるとかはできないんですよ。

あとこういう話もありました。両親は夜も禎子(の容態)が悪くなると、毎日病院に行ってましたが、病院に両親が来るまで禎子は夕食に手をつけてないんです。ずっと両親を待ち続けました。「なんで禎子ご飯食べとらんと？早く食べんね。」って言ったら「いやいや、お父ちゃんお母ちゃんが来るけん。」って言ったそうです。その時に、父が1番「あぁ」と思ったことがあるそうです。それはね…夕食の食卓にりんごがいっぺん出ていたそうです。そのりんごを禎子が残してるんですよ。「どうしてりんご食べんの？」って言ったら、「りんごは硬くて食べられん。」と言ったのですよ。だから父が禎子にジューサーを買ってやれたらと、その時本当に思ったそうですよ。果物のりんごの一片をジューサーにかけてあげれば、すぐに飲めるじゃないですか。そういう状態で禎子というのは本当に辛抱して辛抱して…12歳の子ができる辛抱じゃない。それだけは皆さんしっかり心に留めといてください。それくらい本当に苦しんで、どこにも頼ることができなかった女の子が唯一頼っていたのが折り鶴なんですね。皆さん、禎子が闘病中に実際折った折り鶴を持ってきております。こちらの方から後ろに回しますので、話を聞きながら見ていただきたいと思います。とにかく小さいです。折り鶴を見ていただくと、僕はもう苦しみっていうものと希望と…本当にいろんな気持ちが入ってるなっていう思いがします。それくらい小さいです。終わりましたら、皆さんまたお声をかけていただければ、写メとか撮っていただいても大丈夫なので終わりましたら声をかけてください。とにかく小さい折り鶴です。それを最終的に1600くらい折ったんじゃないかというふうに禎子の両親が言ってました。いよいよ10月25日、最後の日の朝を迎えるわけです。容態が急変して、家族が病室に集められました。主治医の先生から、「お父さん、最後なので娘さんに何か言葉をかけてあげてください。」ということで、言葉をかけたんです。この写真は実際に亡くなった後の葬儀の写真です。父親がかけた言葉、「お金の事は気にしなくていいから、何か好きなもの、食べたいものを言いなさい。」って聞いたんです。そしたら自分の命が尽きるその瞬間までだった。12歳の女の子が、自分のことよりも家族のことを気遣って、お金のことを気にして最後に言った食べ物が…お茶漬けだったんです。当然父親はもっと良いものを言いなさいって言うんですけれども、お茶漬けでいいって聞かなかったんですね。そこからお兄ちゃんがお茶漬けを買いに行くんですね。

ISSN 2758-6715

雅弘:ここは今でも鮮明に残っておりますけれども、神様というのは苦しんだ子を本当にこんなに安らかに連れて行ってくださるのかと思うくらい本当に安らかに、すぅーと目を閉じたんですよ。病院に呼ばれて私が病室に駆けつけた時は、まだ息をしてました。禎子はぐるーっと病室を見回して「お兄ちゃん来てくれたんやね。」って。それで禎子を見て、私も今日禎子が死ぬんだって事はまだピンと来ないんですよ。それでうちの父ちゃんが禎子に「禎子。何か食べたいものないか？」って耳元で言ったら、まだお金のことを心配しているんですよ。自分の命が切れるんですよ？父親がお金に困ってるんじゃなかろうかと。そういう心配があっての禎子の返答が「やーお茶漬けでいい、お茶漬けが食べたい。」そう言うんですよ。日赤の食堂はもう終わってたんですね。だから父が「外に行ってお茶漬けを買って来い。」って私に言ったんですよ。禎子の目の前で。そしたら禎子は「お父ちゃん…外のご飯はいらん、日赤(病院)のご飯がいい」って言うんですよ。外に買いに行くとお金がかかるじゃないですか。だから日赤のご飯がいいって言うんですよ。日赤の食堂は終わってる。だから父が私に目配せして、「行ってこい。」って言いました。私ははっと察しましたから、外にたっーと買いに行ってそれを持って日赤の地下に行って、いつも禎子が食べている茶碗に中身を入れ替えました。それで持って上がったら禎子は納得したんですよ。外のご飯をそのまま持って帰ったら禎子は「お父ちゃん、いらん。」て言ったはずです。だからそこまでごまかして、禎子に最後のお茶漬けを食べさせた。父が1口自分で熱さを確かめてね。どういう気持ちだったんでしょうかね。お父さんの気持ちって。今私が親になってみて初めて分かりますよ。やっぱり自分の子や孫がそういう状態になったと思ったらもうたまりませんね。それで父が「禎子。おいしいか？」って言ったら、禎子が「おいしい～」って言うんですよ。それでもう1口禎子の口に入れてやった。そしたら「おいしかった～」って。そして最後にみんなをぐるーっと見回して、「みんな、ありがとう。」と。ありがとうって言うんですよ。息が切れる寸前に、皆にありがとうという言葉を残すような子っておりますかね。だから皆さんにはどうか、この禎子が本当に言いたかった「ありがとう」という言葉の意味を、ぜひ禎子の命と共に伝えてほしいと思います。

禎子さんが病床で折った折り鶴の写真

裕滋:僕もこの活動を始めた時、おじいちゃんから本当に言われていました。「裕滋、これだけは忘れるな、これだけを伝えてくれ。」って言われたんです。それは「禎子が最後に残した言葉って、ありがとうじゃけん。」って。だから父と活動しながら、いろいろ話してこう考えました。「ありがとう」っていうその感謝の思いですね。我々人間は生きていくと、どうしても自分の我が出てくるし、感謝っていうものがどんどん薄れてくる場面が非常に多くなるんじゃないかなと。それで何に感謝って言うと、周りに感謝というのは当たり前なんですけども、やはりまずは「今、生きていられること」これに感謝をしなくちゃいけないんじゃないかなと。当たり前のように日常が繰り返していくものですから、今生きていくことが当たり前じゃないっていうことに気付かなくなってしまうんですね。だからこの事は禎子ストーリーを伝える上でまず伝えていこうと。まずは生きてることに感謝。それはやはり78年前の当時を見ても、生きられなかった命が沢山あったっていうことも忘れちゃいけない。だからこそ今本当に死にたいくらい辛い苦しい状況にある方、沢山いらっしゃるかもしれないです。でも生きていればやり直しもできるし、生きてさえいれば、本当にいつかは見える景色が変わるっていうことを伝えていきたいなっていうことが1つ。あともう1つ。これが本当に僕らが辿り着いた答えというか。それがやはり闘病中の禎子の振る舞いなんです。自分のことを差し置いて常に相手のことを思う。つまりこれって日本語で言うと思いやりの心ですね。相手を思いやるっていう心こそが平和を作るっていうものに1番必要なんじゃないかというところに辿り着きました。だから海外でもこれまで色んなところでお話をさせていただきましたが、思いやりの心っていうものを佐々木家として伝えていきまして、英語で言ったらコンパッションという訳で

しょうかね。感謝と思いやりの心ですね。これを伝えようということでこれまで活動してきました。禎子が亡くなって、クラスメイトがその経済的に苦しい状況っていうのをずっと見てきてましたから、せめてお墓だけは作ってあげたいということで、募金活動を始めるんです。クラスの中から始まった募金活動が学校中に広まり、それが先生たちの手助けによって全国に当時広がったんです。それで全国で募金が当時で540万集まった。それで亡くなった3年後にできたのが実は原爆の子の像なんです。なのでモデルは佐木禎子ということで、父親(雅弘)が当時高校生の時に募金活動に参加してたんで、これができて、その後ここに来る世界中から来る観光客の方々が禎子ストーリーを聞いて、それを各国にも持ち帰って『折り鶴と禎子』=『平和のシンボル』っていうものが今に伝わって行って。そういうことで伝わってこの原爆の子の像に、本当に世界中の様々な国から平和の祈りを込めた千羽鶴が送られてくるんです。年間で数にして約一千万羽、重さにして約10トンの千羽鶴が、毎年この原爆の子の像に送られてきます。その世界に伝わる平和のシンボルっていうところを、佐々木家としては伝えていく使命があるんじゃないかということで、今見ていただいている禎子が折った折り鶴、これまで国内外合わせてゆかりがある場所であったり、いろんなところ、繋がりに合うところに寄贈してきました。国内外合わせて19カ所に寄贈しておりまして、ほとんどの場所が現地で常設展示をしていただいております。こうやっていろんな場所と繋がることによって、その感謝の思いと思いやりの心というものを一緒に共有できたらいいかなという風に思ってたところに、僕がものすごく共感したものを見つけたんです。これはユネスコ憲章全文ですね。ここには『戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければいけない』という。これは正に本当に僕らが行き着いた答えだったんですよ。心の平和ってことなんです。だから戦争を起こすのも人間、武器を作るのも使うのも人間、この心に平和の砦が築かれていなければ、また同じことを繰り返してしまうっていうところに行き着いたので、僕はいずれこのユネスコの活動と何かリンクさせてもらいたいなっていうところの、今の中央区ユネスコ協会とのご縁になるわけです。本当にこの心の部分というのは日々精進というか。シンプルに1番簡単なようで1番難しい問題なんですね。今でも本当に問題になっております。例えば人を誹謗中傷したりね。命を粗末にするって戦争だけではないですよね。同じ人間同士で殺し合いをしたり。日本はやってませんけれども、本当に今でも戦争をやってるところもありますけれども、今だにこの時代でも戦争が起きるわけで、やっぱりそこにはその心っていうものにまだまだ平和の砦が築かれていないんじゃないかなというところで、今後もこのユネスコの活動と一緒に我々の活動をぜひリンクさせて行き、この折り鶴も心を豊かに平和にするために、少しでも自分のことを差し置いて相手のことを思える思いやりの心というものを、折り鶴を通じて伝えていきたいなと思っております。その心と心を繋げるという意味で、それを是非具現化したいなというところで、(パワーポイントのリストを指して)上から3番目のUSSアリゾナメモリアルパークというところをちょっと見てもらいたいんですが、ハワイの真珠湾のいわゆる記念館なんですよ。先ほどの映像の中で僕が真珠湾で話をしてましたけれども、真珠湾ともう一度心の融和というものができるんじゃないかということで、そこに折り鶴って言うものを通じて何か平和的な活動ができないかなと思い、2012年にこの真珠湾には禎子の鶴を送らせてもらっています。それで実際、あまりこれは日本で知られていないんですけれども、この写真のように真珠湾の資料館の出口のところに禎子を見れるブースが設けられているんです。覗いてみたら、ちっちゃい折り鶴に光が当たって拡大されるというものも、真珠湾で作っていただいたので見ることができます。あまり知られていませんが、こういう交流をさせていただいております。ただ最初に見ていただいたあの動画に『火を送る』ということを今やっている風にありました。あの火は山本達夫さんが持って帰ってこられた、その火の意味は恨みの火ですよ。それを達夫さんが10数年経って心変わりされた。やはり供養の火として、平和の火として使わなくちゃいけないと言った。その火に憎しみの心があったとしても、そこから心変わりをして平和を作ろうっていう、この心の推移をもう一度真珠湾と共有できたらなと思って実は今の活動をやっております。この活動を メインにしたドキュメンタリー映画っていうのを制作しておりますし、そこの最後のシーンに先ほどの火を真珠湾に持っていって、モニュメントを作って設置をするっていう、ここを最後のシーンとして目指して今やっていて、本当にあと少しのところまで来ております。今本当に現地の海軍と交渉したり、現地の博物館の記念館の方はもう許可いただいていて、「むしろそういう火をいただけるなんて光栄で

す。」と言っていただいているので、後はいろんな手続きを踏んでやるだけなんですけども、そこを目指しております。なのでこの映画を含めてこれから残していきたいと思いますので楽しみにしていただきたいという事と、もう1つがやはりこのユネスコの活動にどうしても移行したいという思いが強くあります。ユネスコには3大遺産事業というのがありまして、世界遺産、無形文化遺産、それから世界の記憶というものがあり、僕が着目したのは世界の記憶と言う部分です。ここに禎子が実際に折った折り鶴を世界の記憶として登録してもらいたいなと思って数年前からちょっと動き始めて、昨年実際に文化省の世界の記憶登録委員会さんにお会いして、直接話をいろいろとディスカッションさせてもらいアドバイスをいただいたのですけれども、そうすると折り鶴だけでは難しいと。この記憶っていうものは写真であったりとか文章であったりそういったものを残していくって言うカテゴリーなので折り鶴だけだと…という話だったんですけれども、文科省の担当の方から例えば折り鶴と一緒に禎子さんの何か手書きで残されているものとか、カルテであったりとか…そういった色んな書類があれば1つの禎子ストーリーとしては大丈夫なんじゃないでしょうかということを教えていただきました。例えば先ほどあった入院中の手書きのメモですね。それこそカルテもあります。後は資料館にはたくさん資料が保管されていたので、確認してきたら実際にその原爆の子の像を作る過程の募金してくれた方々の名簿があったりとかするので、そういったものを含めて世界の記憶に申請させていただくことになりました。正式には2024年の偶数月が申請の月で、奇数が登録になりますので、もう今年2023年のものとして登録するものは決まりましたので、来年の2024年に申請をして上手く行けば2025年、戦後80年という区切の年に世界の記憶に登録ができるんじゃないかというところで進み始めました。これも1つ、2025年登録できるように皆様のお知恵をぜひお借りしたいと思い、登録に向けて動いていきたいと思います。ほんとに長時間になりましたけれども、まずは禎子ストーリーというものを、広島に行ってもなかなか知ることができない細かいところをまだ父が元気で話ができますので、当時の体験を聞いていただきつつ、具体的な禎子が過ごした8ヶ月ということを聞いていただいて、そこから我々が伝えたいメッセージは何なのかというところを皆様に今日この場所で知っていただくことができるかな思い、この会を受けさせていただきました。これからまた私は中央区ユネスコ協会の理事をさせていただいておりますので、世界の記憶登録に向けてまた頑張っていきたいと思うんですが、ユネスコにはユネスコスクールというものがありまして、ユネスコスクールのうちの1つが禎子の母校である広島の幟町小学校が認定されています。（ユネスコスクールは日本だけで1000を超えていて、登録には手続きがありそれを越えると国から先生が行って認定がされるという）そのユネスコスクールの中で、子供たちが意識を高く持って平和的な交流を一生懸命やってるんですよね。そのうちの1つが幟町小学校っていう学校がありまして、実は幟町小学校には禎子の折り鶴を7番目に寄贈してますので、この折り鶴を使ってユネスコスクールの中で学生たちにそういう交流をしてもらえればいいかなと思うし、その交流をもっともっと深くしていて、意味のあるものにできるようにこの折り鶴が世界の記憶に登録されれば有意義なものになるんじゃないかと思っております。なので諸々いろんな活動も現在進行形でやっておりますので、皆さんと一緒に心に平和の砦を築けるように、そのメッセージを世界中に発信していきたいなと思っております。ちょうど時間になりましたので、今日はこれでお終いにしたいと思います。

最後に1つちょっとお願いがありまして、その映画を作っている部分で今からその映画のチラシを皆さんにお配りいたします。『希望の明かり』と言うタイトルで、正確には真珠湾にモニュメントを置くっていう最後のシーンまでの佐々木家のドキュメンタリーと、それにプラス今日お話しした禎子及び佐々木家が戦後過ごした環境、事実に基づいたフィクション。このドラマを作ってフィクションとドラマとドキュメンタリーを1つの映画の中で同時に走らせて、最後にその2つのフィクションとドキュメンタリーが結びつくというハイブリットの今までにない映画を制作を開始しました。つい先日映画に対して広島県と広島市から正式な公演の許可が下りましたので、そちらの制作費を今正式に集め始めています。なので資料を見ていただいて、皆さんに少しでもその制作費のほうに協力していただければ嬉しいかなと思っております。今月末広島にも行くんですけれども、広島の方々に多く協力していただきたいという思いがあるんですが、僕が今東京を拠点にしているもので、東京の皆様にも皆様の思いを多く集められたなということで、協賛のメリット等も裏に書いてあります。もしご興味がありましたらご連絡をいただければと思います。本当に

ISSN 2758-6715

これも特別な、これまでに無い平和を作るための大きな大きな1つのコンテンツになると思っております。また英語字幕もつけまして、日本語だけでなく世界発信をしていくつもりでおります。この真珠湾との間ですね。先ほど動画にもありました、長沼はじめさんというまだ102歳の当時の方も残っていらっしゃいました。そのインタビューも終わりまして、今度は真珠湾側でパールハーバーアタックのサバイバーが見つかりました。こちらも100歳オーバーです。そちらの方の取材も始めたいですし、長沼はじめさんとその真珠湾のサバイバーの方々のできれば対面、でも今難しいですからね、まずはオンラインで対面していただくという撮影も考えています。そういったところで、真珠湾との繋がりを通じて心の融和と寄り添い、相手を思う心というものを伝えていきたいと思いますので、また是非この映画もよろしくお願いいたします。では、本当に長くなりました。本当に最後まで聞いていただいてありがとうございました。お疲れ様でございました。気をつけてお帰り下さい。ありがとうございました。

司会：佐々木様から2時間にわたりいただいた涙なくしては聞くことができない、次の未来に禎子様の命を繋いでいくというお話でしたね。平和について深く考えさせられる場面もありましたけれども、何かご質問やコメントはございませんか？

私もそうなんですけども、皆様の中には戦争で家族を亡くした方たちも沢山いると思います。私は実家が茨城県だったんですけれども、両親から広島のことも聞いておりましたので、そんなことを思いながら、どうして戦争は無くならないのかな…私たち人類はどうしてこうやって戦争をしてしまうんだ…と思う所が沢山ありますが、ボランティアのユネスコ活動と心合わせる方たちのことも応援していただけたらなと思っております。

それでは佐々木様と禎子様のことを思い、それから今トルコとイランの情勢が大変ですので1分間の黙祷をお願いいたします。

それでは閉会の言葉とさせていただきます。
皆様ありがとうございました。

会場全体にて1分間の黙祷のようす

佐々木裕滋氏(写真中央)と
当時の中央区ユネスコ協会理事・監事・相談役

ISSN 2758-6715

↑読売新聞　東日本版

↑読売新聞　東日本版

↑経済産業新報

ISSN 2758-6715

祈りの鶴 広がる翼

禎子被爆の記憶 次世代に

福岡の遺族らユネスコ申請へ

「鶴を千折れると病気が治る」。幾つかの紙を信じ、約680羽もの鶴を折り続けた。原爆症で12歳の生涯を閉じた佐々木禎子さんが病床で折った折り鶴など、日米の団体が国連教育・科学・文化機関（ユネスコ）の「世界の記憶」への登録に向け、準備を進めていることが分かった。2024年の申請、被爆80年となる25年の登録を目指す。

（関連記事29面）

広島市の平和記念公園に立つ「原爆の子の像」のモデルとして知られ、原爆症により12歳で生涯を閉じた佐々木禎子さんが病床で折った折り鶴など、日米の団体が国連教育・科学・文化機関（ユネスコ）の「世界の記憶」への登録に向け、準備を進めていることが分かった。2024年の申請、被爆80年となる25年の登録を目指す。

（関連記事29面）

日本関連の「世界の記憶」

- ▽山本作兵衛炭坑記録画・記録文書
- ▽藤原道長の日記「御堂関白記」
- ▽慶長遣欧使節関係資料
- ▽シベリア抑留などの記録「舞鶴への生還」
- ▽古文書「東寺百合文書」
- ▽古代石碑群「上野三碑」
- ▽朝鮮通信使

被爆80年の登録目標

禎子さんは2歳の時、爆心地から1・6キロの広島市の自宅で被爆。10年後に白血病を発症した。8カ月の入院中、折り自らの回復を祈って千羽鶴を折ったが、1955年10月にこの世を去った。

残された折り鶴は、遺族らが運営するNPO法人「SADAKO LEGACY」が米ハワイの真珠湾にあるアリゾナ記念館や、ウクライナのチョルノービリ博物館など国内外の10カ所に寄贈。禎子さんの物語は、平和の象徴として折り鶴の輪が、禎子さんが生涯を閉じた広島市の平和記念公園に立つ「原爆の子の像」の足元に置かれていることなどの保存や活用を目的にユネスコが1997年に登録する制度が始まった。審査は2年に1回で、1カ国の申請は2件以内だが、2カ国以上の共同申請の場合は5カ国まで申請でき、2022年12月現在、「アンネの日記」など748件、日本からは山本作兵衛炭坑記録画・記録文書や、韓国と共同登録した「朝鮮通信使」などが登録されている。

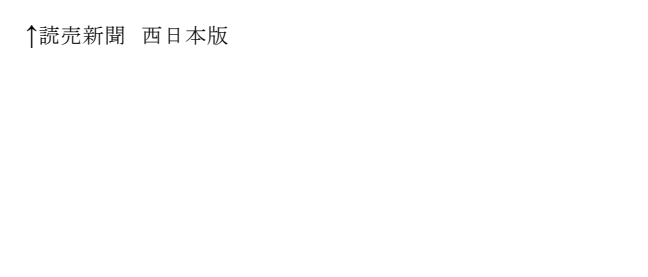
❶11歳当時の佐々木禎子さん（1954年8月撮影）＝SADAKO LEGACY提供
❷禎子さんが折った折り鶴（16日、福岡県筑前町の大刀洗平和記念館で）

2人はね殺害 死刑破棄

仙台高裁 無期懲役判決

ラルク公演 2.4万席「格下げ」

運営3社に措置命令



トルコ 16万棟損壊

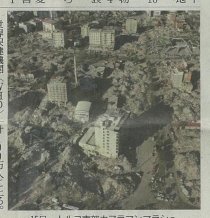
地震 避難生活100万人

【カイロ＝田尾茂樹】トルコ南部で6日に起きた地震で、トルコ政府は15日、被災地で損壊した建物が16万9900棟で、このうち、倒壊したか修復不能の建物は5万5944棟（約2万4923戸）に上ると発表した。調査は継続中で、被害はさらに増えるとみられる。

環境・都市計画・気候変動省の発表によると、被害棟数は5万5944棟（約2万4923戸）に上ると発表した。調査は継続中で、被害はさらに増えるとみられる。

動産の発表によると、被害棟数は5万5944棟（約2万4923戸）に上ると発表した。調査は継続中で、被害はさらに増えるとみられる。

環境・都市計画・気候変動省の発表によると、被害棟数は5万5944棟（約2万4923戸）に上ると発表した。調査は継続中で、被害はさらに増えるとみられる。



15日、トルコ南部カフラマンマラシュの地震で倒壊した建物のがれき＝AP

世界保健機関（WHO）によるとトルコで住居を失った人は推計100万人に上る。被災地では自宅が倒壊し、避難生活を送る人は推計100万人に上る。

↑読売新聞　西日本版